

第四十九回城戸賞応募作品

長濱亮祐

道々、みち子

あらすじ

錆びた自転車が通りを走っている。みち子がペダルを漕ぐたびにギコギコと酷い音が鳴っている。母に介護が必要になってもう五年。夫と暮らすマンションから母が住む団地までを自転車で往復する毎日をみち子はずっと続けている。

その母が心筋梗塞で亡くなった。葬式で喪主の挨拶をするみち子。「母の人生は……」次の言葉が出てこない。母の人生は幸せだったのだろうか。そう思って言葉が続かなかったのだ。

働き始めた有料老人ホーム・ハピネス会泉で、同僚の介護士・清美が入居者の財布からお金を抜いているのを目撃するみち子。過去に起こした交通事故故の莫大な示談金を払っているという清美。もしものときに自分だけのお金が必要だと強く思うみち子。

ある日、みち子は、浦上という老人から、有名店のうな重を買ってきてほしいと頼まれる。食事制限があると断るが、お金を積まれて依頼を受ける。それをきっかけに、みち子と清美は、入居者の頼みを聞いて金を貰う仕事を密かに始める。大川からみち子の胸を揉ませてほしいというもの。お金を貰い胸を揉ませる。車椅子の哲子の依頼は、施設を抜け出して母の墓へ連れて行ってほしいと言っもの。真夜中、施設を抜け出して哲子の母の墓へ行くみち子。

老人たちの依頼を受けているうちに、みち子は夫の孝介との生活に疑問を抱き始める。自分が本当に欲しいものは何だろう、そう思うみち子。

大川が死んだ。トンカツをのどに詰まらせたのだ。みち子は、裏の仕事がバレないようにトンカツの代わりに靴下をねじ込んだ。思惑通り、大川はボケて靴下を食べて死んだと判断された。罪悪感にかられて裏の仕事をみち子はやめる。清美は一人で続けるが、老人たちは仕事を頼もうとしない。焦った清美は、入居者のキャッシュカードを盗み逮捕される。大川のことがバレるかも。みち子は施設を飛び出した。

家に帰るみち子。なぜか孝介が優しい。昇進したという。もう働かなくていい、そう言って笑う孝介。ここには私の欲しいものはない。そう気づいたみち子は、母の形見のぬか壺を割ると、その中に隠した金を持って家を出て行くのだった。

人物

恩田みち子 (40)	ハピネス今泉の介護士
淡口哲子 (77)	ハピネス今泉の入居者
菱山清美 (44)	ハピネス今泉の介護士
山田樹里 (21)	ハピネス今泉の介護士
恩田孝介 (42)	みち子の夫
恩田志津子 (76)	みち子の義母
河野太 (36)	清美の彼氏
大川玄一 (80)	ハピネス今泉の入居者
浦上三郎 (77)	ハピネス今泉の入居者
神原浩一 (42)	ハピネス今泉の事務員
北村文子 (75)	みち子の母
田端由加 (37)	みち子の妹
小島豊 (84)	ハピネス今泉の入居者

○通り

自転車が通りを走っている。恩田みち子（40）がペダルを漕ぐたびギコギコと酷い音が鳴っている。

○団地・表

団地の前に自転車を止めるみち子。袋いっぱい食材を両手に持って階段を上っていく。

○北村家・台所

みち子が、ぬか壺に手を突っこみ手早く混ぜている。
手を洗ってぬか壺をしまうと料理を作り始める。
ブザーが鳴る。寝室からだ。何度も鳴るブザー。みち子、溜息をついてガスの火を止める。

○同・寝室

みち子、入ってくる。
介護ベッドで寝ている北村文子（75）。ベッドの近くに取りつけられた複数の鏡。鏡の反射で窓の外が見えるようになっている。

みち子「緊急用なんだからブーブー鳴らすの止めてよ」

文子「鳴らすためのブザーだろ」

みち子「で、何？」

文子「外の鏡がズレてる。直して」

みち子、あきれて

みち子「今度はどこのぞく気？」

文子「人聞きの悪い事言わないで。ベランダ見てるだけだろ」

みち子「それをのぞきって言うの」

文子「いいからさっさと直して」

みち子、窓の外に設置された鏡の角度を直す。

みち子「これでいい？」

文子、近くの鏡を見ながら

文子「もう少し右、行き過ぎ。そうそう」

× × ×

みち子が文子の足を揉んでいる。

文子、鏡で向かいの団地のベランダを見ている。

文子「ぬか床は？」

みち子「もうやった」

文子「嘘ついてるだろ」

みち子「本当だって」

文子、みち子の手を取り匂いを嗅ぐと満足そうにうなづく。

みち子「洗ってもとれないんだから、匂い」

文子「あれは三十年ものだからね。私が死んだらあんたが継ぐんだよ」

みち子「勘弁してよ」

鏡に向かいの団地のベランダでタバコを吸う老人が映っている。

文子「松原のジジイ、また禁煙失敗してるよ。

どうしようもないね、あいつは。あ、あの

家の嫁、またお腹大きくなって。ポコポコ

ポコポコ、よくできるわ」

みち子、文子をじつと見る。

文子、みち子の視線に気づいて

文子「何？」

みち子「外、行きたかったら遠慮なく言つてよ。何とかするから」

文子「誰が行きたいなんて言った？こんな歩けもしない姿、人に見られるくらいなら死んだ方がマシだね」

マッサージを続けるみち子。足に痛みが走ったのか、文子の顔がゆがむ。

文子「痛い、痛い。あんたは何をやってもヘタクソ。マッサージひとつできないんだから。あんたじゃなくて由加が近くにいたらね」

みち子の手が止まる。

文子「もういい。マッサージ器取ってきて」

みち子「そんなのあった？」

文子「あんたの部屋だよ。早く」

○同・みち子の部屋

物置になっている部屋でマッサージ器を探すみち子。

壁に「幸福 六年二組 北村道子」と筆で書かれた半紙が貼ってある。

それを見つめるみち子。

寝室から文子の声が聞こえる。

文子の声「ああ、痛い痛い。死にたい死にたい……」

みち子、よどんだ空気に耐えられず窓を開ける。風がみち子の髪を揺らす。

と、窓から鳩が部屋に入ってくる。

みち子「！」

部屋にあった箒を振り回すみち子。

窓から出て行く鳩。

「幸福」という文字にいつのまにか鳩の糞がかかっている。

タイトル『道々、みち子』

○通り〜マンション・表

ギョギョと酷い音を立ててみち子が自転車走らせている。

みち子、マンションの前で自転車を降り中へと入って行く。

○恩田家・キッチン〜リビング

みち子が料理を作っている。

玄関のドアが開く音がして恩田志津子(76)が入ってくる。

志津子「ただいま。疲れたわ〜」

みち子「ジャズダンスですか」

志津子「そう。汗かいて倒れそう」

志津子、リビングに放置された洗濯物を見て

志津子「あら、いつもにも増してお綺麗なこと」
みち子「これ終わったら片づけよう」と

志津子「相変わらず口だけは達者だわ。で、

今日は何？」

と志津子が鍋をのぞき込む。

志津子「また煮物？孝介も大変だね。毎日毎日同じものばかりで」

みち子「そんなに同じものばかりは……」

志津子「そういうのなんて言うか知ってる？

バカの「つ覚え。言っちゃった！」

と、志津子が舌を出す。

みち子、何も言い返せない。

志津子「終わったら、あれ、さつさと片づけ
てよ」

みち子「（笑顔をつくって）もうできますか
ら」

火を止めて煮物を味見するみち子。と、
スマホが震える。夫の孝介からのメッ
セージだ。

孝介のメッセージ「飲み会。晩飯不要」

「OK」とスタンプを返すみち子の目
が死んでいる。

○団地・表

団地の前、みち子の自転車が止まって
いる。

○同・北村家・寝室

ベッドで眠っている文子。

○同・台所・居間

田端由加（37）、テーブルにタッパ
ーを置く。

みち子が蓋を開けて中を見る。色とり

どりで食欲がわく由加の料理。

由加「どう？美味しそうですよ」

みち子「……これ大丈夫なの？」

由加「大丈夫って何？」

みち子「お母さん、最近飲み込むの大変そう
だから」

由加「ちゃんと柔らかかくしてるし。ネットで
やり方見て作ったんだから。母さんだって、
たまには美味しいもん食べたいでしょ」

みち子「はあ？」

由加「別にお姉ちゃんのがマズいって言って

るわけじゃないの。気分転換も必要ってこと。それと」

由加、「間違いだらけの在宅介護』等の記事が書いてあるスマホの画面を見せる。

由加「これウチの会社で企画した記事。自分でできることは自分でさせなきゃダメだってお姉ちゃんやり過ぎなんじゃない？あとで送るから読んでみて」

みち子、料理の手を止めて振り返る。

みち子「あんたね、私が」

寝室からブザーの音が聞こえる。

由加「お母さん？」

由加、立ち上がる。

みち子「ほっといていい。どうせ大した用事じゃないんだから」

由加「でも」

由加、寝室へと行く。

由加の声「お姉ちゃん、救急車！」

タッパーの食材をつまみ食いしていたみち子、驚いて立ち上がる。

○葬儀場・別室（夜）

喪服姿のみち子や由加、志津子らが通夜振る舞いの料理を食べている。

部屋の隅でみち子の夫・孝介（42）が電話をかけている。

アルコールが入ってくだけた雰囲気。

由加「お母さんが倒れて五年。本当にお疲れさまでした。じゃ献杯」

由加がビールのグラスをみち子のグラスに合わせる。

みち子「由加」

周りを気にするみち子。

由加「だってそうでしょ。ずっとお母さんの世話して。これからは自分の人生をしっかり生きなきゃ」

みち子「別に私、自分の人生を生きてなかったわけじゃない」

由加「お姉ちゃん、そういうとこだよ」

みち子「なにがそういうとこよ」

由加、みち子の顔をじっと見つめている。

みち子「……何？」

由加「ホッとした？」

みち子「そんなことない」

電話を終えた孝介が戻ってくる。

ムスツとして空のグラスをみち子に突

き出す孝介。

注がれたビールを一気に飲み干すと、

再びグラスを突き出す。

孝介「早くしろよ」

みち子「ごめんなさい……何かあった？」

孝介「下がんだって、給料。来月から」

みち子「え？」

孝介「若造が。電話ですの話かよ」

孝介の声に振り返る数人の弔問客たち。

みち子「それ、帰ってから」

孝介「業績良くないからって。バカが。だっ

たらあちこち支店作ってんじゃねえよ。な

んでこつちがツケ払うんだ！」

部屋中に響く孝介の声。由加も非難す

るような目で孝介を見る。

みち子「ちよつと、声」

孝介「なんだよ。亭主の愚痴も聞けないのか

よ？」

みち子「だから声」

孝介「おまえにも働いてもらうから。マンシ

ョンのローンだってあるんだし。こつちは

親の介護だからってだいで我慢してたんだ」

みち子「……」

志津子、ずっと孝介の後ろに立って

志津子「孝ちゃん、おトイレ行こうか」

孝介「別にションベンなんか俺は」

志津子「孝ちゃん」

孝介「なんだよ」

孝介、志津子の迫力に押されて立ち上がる。

志津子、足元がおぼつかない孝介を連れて部屋を出て行く。

○同・本会場

みち子が祭壇の前に立っている。祭壇には文子の遺影。由加とその夫や子供、孝介、志津子の他、数は少ないが文子の友人や近所の住人などがある。

みち子「本日はお忙しいところ、亡き母、文子の葬儀にご参列くださいまして誠にありがとうございます。えー、母の……母の人生……、母の人生は……」

みち子、言葉が続かない。

× × ×

北村家・みち子の部屋

「幸福」という文字が書かれた半紙にかかった鳩の糞。

文子の声が重なる。

文子の声「ああ、痛い痛い、死にたい死にたい……」

× × ×

みち子「母の人生は、幸せだったと思います」
弔問客の一人が嗚咽を漏らす。それをきっかけに次々に泣き始める弔問客。由加も泣いている。
みち子、涙が出ない。

○恩田家・キッチン（夜）

みち子、キッチンの床で文子のぬか床をかき混ぜている。

○同・リビング（夜）

スマホを手にぬか漬けを齧っているみち子。

見ているのは求人サイトのである。
年齢三十五歳まで、要運転免許……。
条件の合わない画面を見て自嘲気味に笑うみち子。

パジャマ姿の志津子が入ってきて冷蔵庫から飲み物を取り出す。

みち子、ある求人に手が止まる。近所のスーパーマーケットのパートである。志津子がみち子のスマホをのぞき込む。

志津子「やめてよ、近所のスーパーとか。ダンスの人もよく行くんだから。見られたらなんて言われるか」

みち子「でも、なかなか見つからなくて」

志津子「それ」

志津子、みち子が齧っているぬか漬けを指さす。

みち子「あ、いただきます？」

志津子「苦手なの、その匂い。フタ閉めてもらえる？」

みち子「すみません」

みち子、ぬか漬けが入ったタッパーのフタを閉める。

志津子「介護やればいいじゃない？ずっとやってたんだし」

みち子「ええ、でも」

志津子「何？他人の介護はしたくない？おお恐い、わたしも見捨てられるわね」

みち子「お義母さん」

志津子「ちよつと贅沢なんじゃない？あなた、他に何かできるわけじゃないんだから」

志津子、部屋を出て行く。

みち子、避けていた介護の求人を見ることがすぐに閉じる。

○ハピネス今泉・廊下

食事が積まれた配膳車をみち子が押ししている。先導しているのは、教育係の菱山清美（44）である。

○同・食堂

清美が入ってくる。続いて入るみち子。中央に大きなテーブル、その周囲に小さなテーブルが五、六台置かれ、老人たちがぼんやりと座っている。

部屋の奥に設置されたテレビの音だけが妙に響いている。

清美がやる気のない顔でみち子を見る。

清美「名前、覚えといて」

清美、老人たちに名札付きの食事のプ

プレートを配る。名札には、名前の他に食事の注意事項などがメモされている。

清美「大川さん。こちら新人」

みち子「恩田です。よろしくお願いします」

大川玄一（80）、みち子を舐めまわすように見て

大川「またババアか。もつと若い子が入れるよな」

清美、大川をにらむと次の入居者に食事を配る。

清美「浦上さん」

みち子「恩田です。よろしくお願いします」

浦上「よろしくお願いします！」

元氣よく返事する浦上三郎（77）。

浦上、食事を見て不満げな顔。

浦上「わたし、もつと油っぽいのが食べたいんですが」

清美「食事制限あるでしょ」

清美が隣にプレートを配る。

清美「小島さん」

みち子「恩田です」

小島豊（84）、みち子を見て

小島「冴島先生！お久しぶりです」

みち子「はい？」

清美、みち子の耳元で

清美「相手してやって」

みち子「……あの。お久しぶりです」

小島「国民学校以来じゃないですか。またお会いできるとは、感激です」

みち子「あ、はい。国民学校以来ですね、お元気でよかったです」

小島「会って早々申し訳ないのですが、私、家に帰ります。明日、現場が早いもので」

みち子「帰る？えーと、あの」

清美、イライラを隠さずに

清美「小島さん、でも今日は遅いから。また明日にしましょ、いい？」

小島「そうですか？そうした方がよいですかね？」

清美「はい、お願い。じゃ、冴島先生、ちよ

つとお借りします。また戻ってきますから」
小島「はい、よろしくお願ひします」

清美、隣のテーブルにプレートを配る。

清美「淡口さん」

みち子「恩田です。よろしくお願ひします」

哲子「はい、よろしくね」

車椅子の淡口哲子（77）、優しそう

な笑みを浮かべてみち子を見る。

哲子「ぬか漬け？」

みち子「え？」

哲子、みち子の手を取って匂いを嗅ぐ。

哲子「そうですね。私もよく漬けてたから」

みち子「やっぱ匂います？」

哲子「私、大好きなの。今度食べさせて」

みち子「あ、はい」

清美「次行っいいい？」

清美、イラついた目でみち子を見る。

みち子「すみません」

清美、食事のプレートを置く。

清美「西久保さん」

みち子「あの、恩田です」

西久保タエ（80）、膨らませた口を

モグモグさせている。

清美「西久保さん、何か食べてます？」

答えない西久保。

清美「西久保さん？出して」

清美、西久保の口を強引に空けて、中

から何かを取り出す。それは唾液まみ

れになった靴下。

驚くみち子。

清美「異食行動」

みち子「はい？」

清美「異なるって字に食べるって書いて異食。

認知症だとよくあるの。ほんとやだ」

× × ×

すべて配り終わり空になっている配膳
車。

清美「あなた小島さんの見守りして」

清美、それだけ言っって西久保の方へ行
く。

みち子「え？」

みち子、清美の後ろをついて行く。

清美、舌打ちして

清美「何？忙しいのよ」

と、西久保の口にスプーンを運ぶ清美。

みち子「すみません、小島さんって？」

辺りを不安そうに見回すみち子。

清美、大げさに溜息をついて

清美「覚えてって言ったじゃない」

と、小島を指さす。

みち子、小島の方へ小走りで駆け寄る。

○同・居室

みち子が、ベッドで寝たきりの老人の
体位を変えている。

その後ろに立っている清美、ロクにみ
ち子の方を見てもいない。

みち子「こんな感じでもいいですか？」

清美「え？なんか言った？」

みち子「こんな感じで大丈夫でしょうか？」

清美「ああ。いいんじゃない？」

みち子「どうも」

清美「あんたさ、なんでこの仕事やろうって
思ったの？」

みち子「ちよつとでも家計の足しになればと」

清美「そうじゃなくて何で介護なの？他にも

あるでしょ？スパーとか、コンビニとか」

みち子「いや、もう四十ですし、なかなか仕

事見つからなくて。で、母の介護やってた
んで」

清美「それ嫌味？わたし年上なんだけど」

みち子「いや、そんなことは」

清美「で、お母さんは？」

みち子「先日亡くなって」

清美「へー。母親の介護終わって、よくまた

介護なんてやろうと思うよね。私だったら

絶対無理だわ」

清美、腕時計を見て

清美「あー、もうこんな時間。あと四人いる
から。漏らしてなきやいいけど」

清美、腰を叩きながら部屋を出る。
みち子、続いて出ていく。

○同・事務室

みち子、タイムカードを押している。
続いて同僚の介護士・山田樹里（21）、
入ってくる。

事務員の神原浩一（42）、みち子を見
て

神原「今日どうでした？」

みち子「まあなんとか」

神原「菱山さん大丈夫だった？ けっこうキツ
かったでしょ。樹里ちゃんもだいたいぶイジメ
られたもんね」

樹里「それマジで。なんであんなイライラし
てるんすかね」

神原「嫉妬だよ、嫉妬。若い子に。それでみ
んな辞めちゃうの」

樹里「私が残ってるの奇蹟ですから。もっと
給料上げてくださいよ」

神原「俺権限無いから。本当は菱山さんじゃ
なくて別の人を教育係にしたいんだけどね。
人いなくて。まあ、うまくやってよ」

みち子「ええ」

清美が部屋に入ってくる。

神原「（清美に） 恩田さん、がんばってたみ
たいね」

清美「前の人みたいにすぐ辞めなきゃいいけ
ど」

清美、タイムカードを押して出て行く。
神原「辞めたの自分のせいじゃんね？」

苦笑いするみち子。

○恩田家・リビング

みち子が洗濯物を畳んでいる。

孝介、テレビを見ながらソファでくつ
ろいでいる。

孝介「そりゃ大変だったな。疲れたろ」

みち子「外で働くの久しぶりだったから」

孝介「これで少しはわかったろ」

みち子「なに？」
孝介「働く俺の大変さが」

洗濯物を畳む手が一瞬止まる。

みち子「……うん、そうかも」

孝介「かも、じゃなくて、そう、でしょ」

みち子「そうね」

孝介「じゃあ今日の晩メシ」

みち子「ん？」

孝介「簡単な奴でいいよ、ちゃちゃつと作って」

みち子「……ありがと。これ終わったらすぐ」

○同・風呂

湯船につかったみち子、ウトウトしている。そのまま眠りについて湯船に落ちる。

○同・寝室（朝）

ハッとして目が覚めるみち子。

目覚ましが鳴っている。慌てて止める。

孝介「うるっさ……」

隣で眠る孝介が布団を被る。

みち子「ごめん」

みち子、ベッドを抜ける。

○同・洗面所

みち子、顔を洗って鏡に映った顔をじつと見ている。やつれているその顔。

○同・キッチン

みち子、手際よく料理を作り夫用の朝ご飯にラップをかけ、自分用のは弁当箱に詰めていく。

○通り／ハピネス今泉・表

ギョギョと音を立てて走るみち子の自転車。

ハピネス今泉の門をくぐる。

○ハピネス今泉・浴室

リフト浴用のチェアに座った大川を清美がシャワーで洗っている。

それをみち子が後ろで見ている。

清美「母親のやってたんでしょ？」

みち子「はい」

清美がシャワーをみち子に渡す。

みち子、大川の体を洗い始める。

大川「中々のデカパイだな」

大川がみち子の胸をつかむ。

悲鳴を上げて離れるみち子。

大川「大げさな声あげて。オバさん、もしかして処女か？」

みち子、助けを求めるように清美を見る。

清美「時間ないから。早く洗って」

みち子、恐る恐る大川に近づいて再び洗い始める。

みち子「本当に、やめてもらえますか」

大川「怖い顔して。コミュニケーションションだろ。

そんなことじゃここでやっていけないよ」

みち子、強張った顔のままシャワーで

大川を洗う。

○同・休憩室

みち子が一人、弁当を食べている。

食欲がないのか、あまり手を付けていない。

神原、入ってきて

神原「一人？菱山さんは？」

みち子「見てないですが」

神原「そっかー。来週のシフトで確認したいことあんだけど」

みち子「わたし、探してきましたよか？」

神原「（それを待ってたという感じで）いいの？ごめんね休憩中に。助かるわ」

みち子「いえ」

みち子、立ち上がる。

○同・廊下

廊下を歩くみち子。

居室で物音が聞こえる。
みち子、気になってドアを開ける。

○同・居室・中

入ってくるみち子。
清美らしき後ろ姿が見える。
みち子、近づくと清美が入居者のカバンを物色しているのが見える。
カバンから財布を取ると、中から万札を抜き出す清美。

みち子「！」

驚いて物音を立てるみち子。

清美、振り返る。

みち子「あの」

清美「なんでもないから。ちよつと買い物頼まれて」

清美の手が震えている。

みち子、清美をじつと見る。

みち子「お金が必要なら私がお貸しします。

だから、それは」

みち子と清美、じつとにらみ合う。

清美「何でもないって！」

清美、万札を財布に戻すと部屋を出て行く。

○同・トイレ・中

西久保の排泄介助を清美とみち子が一緒に行っている。

清美、西久保を車椅子から立ち上がりさせてズボンとパンツを降ろし、便座に座らせる。

清美「(西久保に) 終わったらブザー押してください」

清美、みち子の目を見ようとしなない。

トイレから出ようとしてドアの前で止まる清美。

清美「さっきの絶対誰にも言わないで」

みち子「……はい」

清美「三年前、事故を起こしたの」

みち子「……」

清美「夜勤明けに新聞配達の人を車で撥ねた」
みち子、息をのむ。

清美「命は助かったけど、その人、足を引き
ずるようになってね。裁判で示談金が七百
万」

みち子「あの」

みち子、西久保を見る。

清美「大丈夫、聞かれてもどうせ覚えてない
から。(西久保の耳元で) 外出てますから」

清美、みち子と一緒にトイレを出る。

○同・トイレ・外

清美「あんた結婚してんだっけ？」

みち子「ええ」

清美「どうせ旦那の稼ぎ、大したこと無いん
でしょ？気をつけなよ。私みたいに事故し
たら一発で人生詰むから」

ブーツとトイレからブザーが鳴る。

みち子、ビクツと体が震える。

○同・更衣室

みち子と樹里が着替えている。

樹里「だいたい風呂もトイレも面倒見てるん
だし、私にちよつとは遺産くれてもいい
と思うんですよね。そう思いませんか？」

みち子「さすがにそれは」

樹里「だってそうじゃないですか？顔も見せ
ない子どもとか孫にあげんだったら。私の
ほうがお世話してるんだし」

みち子「それはそうかも知れないけど」

樹里「恩田さんも一年もやったら絶対そう思
いますって。けっこう貯めこんでる人いる
みたいですよ、ここにも」

樹里、派手な私服に着替え終わって

樹里「じゃお先です」

樹里、出て行く。

○同・ロビー

私服に着替えたみち子、出て行こうと
して振り返る。

廊下を歩く老人たちの顔を見る。

○通り

自転車を漕ぐみち子。ペダルを漕ぐと、相変わらずギコギコと酷い音が鳴っている。

○恩田家・リビング（夜）

孝介がソファに寝転がり携帯ゲームをしている。

ソファの周囲に孝介が脱ぎ捨てた服や雑誌が散らばっている。

洗い物を終えたみち子、孝介の側に来て

みち子「あの」

孝介、ゲームに夢中で気づかない。

みち子「聞いている？」

孝介「（ゲームしながら）聞いている」

みち子「新しい自転車買いたいんだけど」

孝介「（ゲームしながら）自転車？」

みち子「うん。なんかペダル漕ぐと変な音するし、もう十年使ってるし」

孝介、携帯ゲームをやっている。

みち子「ねえ」

孝介「（ゲームしながら）ああ、クソッ、死んだ！」

孝介、起き上がってみち子を見る。

孝介「何？」

みち子「だから、自転車買い替えたいって」

孝介「あのさ、音鳴るだけで買い替えるとか、ありえないから。そんなの油差しとけばいいんだよ」

みち子「（小声で）何度もやってるんだけど」

孝介「何？だから油差せばいいじゃんって」

みち子「……そうね」

孝介「風呂入るわ」

孝介、立ち上がり

孝介「明日飲み会だから。ご飯いらない」

みち子「……」

孝介「それとさ、ここ掃除しといて。母さん

がみち子の掃除が雑だった」
孝介、出て行く。

○ハピネス今泉・食堂

みち子が浦上の食事を見守っている。
浦上、食事に手を付けていない。

みち子「どうしました？食欲無いですか？」

浦上「あの、恩田さん」

みち子「名前憶えてくれたんですか？」

浦上「ええ、恩田さん」

みち子「うれしい」

浦上「頼みがあります」

みち子「何です？」

浦上「この食事、すぐくまずいんです。だから堀内のうな重、買ってきてもらえませんか？」

みち子「堀内のうな重？」

浦上「知らないんですか？堀内のうな重。極上です」

みち子「そうなんです。でも、それはちょっと」

浦上「お金はあるんです」

浦上、みち子の手に五千円札を握らせる。

みち子「ちょっと、困ります」

浦上「ウーバー何とかつてありますよね、この前で受け取って、バレないように渡してくださいね」

みち子「浦上さん、食事制限ありますよね」

浦上「だから頼んでるんです。釣りは入りませんから」

みち子「困ります」

浦上、さらに五千円を上乗せする。

浦上「これでどうです」

みち子、お札を押し返して

みち子「本当に困ります」

浦上の手、プルプルと震えている。

浦上「あなたにはがっかりだ！」

浦上、食事のプレートをテーブルから払いのける。ご飯や汁などを頭から浴

び、ビショビショになるみち子。
清美、駆け寄ってくる。
清美「浦上さん、どうしました？（みち子に）
ちよつと、雑巾」

○マンション・駐輪場（朝）

みち子が自転車のチェーンに油を差している。ペダルを回す。快適に回るチェーン。

○ハピネス今泉・前の通り（朝）

みち子がさつそうと自転車のペダルを漕いでいる。
ハピネス今泉が近づいてくる。
徐々に自転車からいつものギコギコ音が聞こえてくる。
ガチャンと音がしてチェーンが外れる。バランスを崩して倒れるみち子。
直そうとするが、中々はまらないチェーン。

○同・食堂

昨日と同じように浦上の食事を見守っているみち子。
離れた場所で清美が西久保の食事介助をしている。

浦上、食事に手を付けようとしなない。

みち子「浦上さん、ほら、おいしそうですよ」

浦上「食べたくありません」

みち子「そんなこと言わずに」

浦上「うな重」

みち子「うな重？」

浦上「私、心臓の病気なんです。いつ死んでもおかしくないって言われています。だから頼んでるんです。このまま食べたい物も食べられずに死ぬより食べたい物を食べて死にたいんです」

みち子「……いいですよ」

浦上「え？」

みち子「うな重」

浦上「本当ですか！」

清美、チラっとみち子の方を見る。

みち子「その代わり、お金は貰います」

○同・前の通り

ウーバーの配達員から弁当を受け取る
みち子。トートバッグに弁当を入れて
施設へと歩いていく。

○同・廊下→浦上の居室

トートバッグを持ったみち子が足早に
歩く。居室に入りベッドで寝ている浦
上に近づく。

みち子「買ってきました」

トートバッグからうな重を取り出そう
とするみち子。

と、居室のドアが開く。

小島「あれ？ここ私の部屋ですよね？」

みち子「小島さんの部屋、隣です、隣」

小島「あれー、そうだったっけ？」

出て行く小島。

みち子「浦上さん、おトイレ行きましょうか」

○同・廊下

みち子の付き添いで廊下を歩く浦上。

向かい側から清美が歩いてくる。

みち子、緊張で気づかないうちに足早
になっている。

すれ違うみち子と清美。

清美「恩田さん」

みち子、ビクツとして立ち止まる。

みち子「はい？」

みち子、声が震えている。

清美「歩くの早い。もつと浦上さんのペース
に合わせて」

みち子「すみません」

ホッとして歩き出すみち子と浦上。

○同・トイレ

みち子と浦上、トイレへ入り、中から

鍵を閉める。

みち子が浦上を便座に座らせる。

トートバッグからうな重弁当を取り出すみち子。

浦上が思わず唾を飲み込む。

浦上「うな重」

みち子「うな重」

浦上「これ、うな重のお金」

と、一万円を出す浦上。

浦上「それと、お礼です」

浦上、さらに一万円を出す。

みち子「こんなに？」

浦上「どうせ持ってあの世には行けないですから。お金は生きてるうちに使わないと」

みち子「すみません」

浦上、うな重の蓋を開け、思いつきり匂いを嗅ぐ。

みち子、ごくりと生唾を飲み込む。

浦上、一気にうな重をかき込もうとして

浦上「あの」

みち子「はい？」

浦上「少し食べます？」

みち子「うな重？」

浦上「うな重」

× × ×

浦上とみち子、割り箸を二つに折ってそれぞれ使い、うな重をガツガツと食べている。

みち子「浦上さん、ゆっくり」

かまわずに口いっぱいにはおぼる浦上。

○同・トイレ前

閉められたトイレのドアの前を歩きかう介護士や入居者の老人たち。

○ハピネス今泉・食堂（朝）

清美とみち子が、入居者の血圧を測っている。

清美が浦上の手に血圧計を巻いている。

みち子、それを見て

みち子「あっ、浦上さん私やります」

清美「そう？じゃお願い」

みち子「はい、じゃ浦上さん、血圧測りませ
ね」

みち子、浦上に顔近づけて

みち子「(小さな声で) 血圧、変わりないで
す。よかったですね」

浦上「あの、またお願いしたいんですが」

みち子「！」

清美、不審そうな顔でみち子を見る。

○同・廊下く浦上の居室

トートバッグを持ったみち子が歩いて
いる。居室に入りベッドで寝ている浦
上に近づく。

みち子「じゃ、おトイレ行きましようか？」
立ち上がる浦上。

○同・廊下

みち子の付き添いで廊下を歩く浦上。

清美、それに気づいて後をつける。

○同・トイレ

みち子と浦上、トイレへ入り中から鍵
を閉める。

みち子、トートバッグから寿司折りを
取り出す。

みち子「お寿司」

浦上「お寿司」

浦上、ポケットから万札を出してみち
子の手に握らせる。

みち子「ありがとうございます」

浦上「じゃ」

浦上、弁当に箸をつけようとして

浦上「少し貰います？お寿司」

みち子「じゃ、少し」

みち子と浦上、寿司をガツガツと食べ
始める。

と、外から鍵が開き、扉が開く。

立っているのは清美である。

× × ×

清美「みかけによらずって感じだね、あんた」
みち子「すみません」

清美が浦上の寿司折から中トロをつまんで口に入れる。

浦上「あ！」

清美「あー美味しい。浦上さん、こんな脂っぽいの食べてたらずぐ死ぬよ」

みち子「わたしクビでしようか？」

清美「別に誰にも言わないから。その代わりに、私も嚙ませて」

みち子「え？」

清美「お金が必要だって言ったでしょ？」

みち子「……」

清美「浦上さんはいいよね？」

浦上「私は、みち子さんがやってくれるなら

文句はありません」

みち子「……わかりました」

清美「だったら決定。浦上さん、あなたの他に何か食べたがってる人いない？」

浦上「私の他に？」

清美「そう。顧客を増やさなきゃ稼げないでしょ。口が堅い人」

浦上「探しておきます」

みち子、不安な顔でそれを見ている。

○清美のアパート・表

二階建てのアパートの階段を清美が上っていく。

○同・玄関

清美、入ってくる。

三和土に踵を踏んづけた男物のスニーカーがある。

○同・室内

河野太（36）がビデオカメラに向かってしゃべっている。

テーブルには食べかけのコンビニ弁当

が五つほど置かれている。

河野「はい！ということで！私、フトキンの
お勧めはこちら！まんぞくチキン南蛮弁当
が大・優・勝！」

河野、大げさな動作で弁当を指差す。

清美、部屋に入ってくる。

清美「ふっくん、ただいま」

河野、振り向いて

河野「いま動画撮ってんじゃん。勘弁してよ」

清美「あ、ごめん」

河野「こういうのってテンションが大事じゃ
ん？切れちゃったよ、テンションが」

清美「……そのカメラ、どうしたの？」

河野「いいでしょ？やっぱ画質にはこだわり
たいから」

清美、戸棚の引き出しから封筒を取り
出して中身を見る。

清美「ここから取った？」

河野「借りただけ」

清美「このお金、慰謝料の振り込み用だつて
言ったよね？」

河野「……うん」

清美「どうすんのよ！」

河野「……」

清美「どうすんの！」

河野「……どうすんのつて、無理だろ！七百
万なんて！払えないつて」

清美「……」

河野「大丈夫だよ。俺がこれで稼ぐから。ち
よつと外出ててよ。撮り終わったら戻って
きていいから」

○同・アパートの廊下

部屋から出た清美、二階の廊下から外
を見る。若い女性たちが楽しそうに歩
いているのが見える。

清美、電子タバコを深く吸うと、女た
ちに向けて煙を吐く。
すぐに空へと昇っていく煙。

○恩田家・キッチン（リビング）（夜）

みち子、財布の中に入っているお金を
見ている。浦上から貰った一万円札が
数枚入っている。
リビングでは孝介がテレビを見ている。
みち子の視線、キッチンシンクのキャ
ビネットに目が行く。

○同・寝室（夜）

電気の消えた室内。
孝介、いびきをかいて眠っている。
みち子、そっとベッドを抜け出す。

○同・キッチン（夜）

電気の消えた室内。
みち子、入ってくる。
戸棚からビニール袋を取り出してお札
を入れる。
キッチンのキャビネットからぬか壺を
出すと、ぬか床の中にお札の入ったビ
ニール袋を突っ込む。
と、キッチンの電気が点く。

志津子が立っている。

志津子「うわっ」

みち子「きゃっ」

志津子「みち子さん？心臓止まるかと思った。

何してるの、こんな時間に」

みち子「あの、ぬか床、混ぜるの忘れてて。

お義母さんは？」

志津子「ちよっとのど乾いただけよ」

志津子、冷蔵庫からミネラルウォーター
ーを取り出して飲む。

ぬか壺の蓋を閉めてキャビネットへ入
れるみち子。

みち子「おやすみなさい」

志津子「電気ぐらい点けてやりなさいよ、気
持ち悪い」

志津子出て行く。

ホッとするみち子。

○同・前の通り

清美、ウーバーの配達員から弁当を受け取りハピネス今泉へ歩いてく。

○同・トイレ・中

便座に座り弁当をがつつく老人。

清美、それを便所の隅で見ながらお金をポケットに入れる。

○同・休憩室

みち子が一人、テレビのワイドショーを見ながら弁当を食べている。

テレビの声「知ってます？一個百五十円のカップラーメンが富士山ではなんと六百円！平地では当たり前にある物も富士山では貴重ですからね、物の値段も変わるわけです」

清美、ドアを開けて入ってくる。

みち子の他に誰もいないのを確認する

清美。

清美「大川が呼んでる。あんたをご指名だつて」

○同・トイレ・中

便座に座った大川がみち子を見ている。

みち子「何が食べたいんですか？」

大川「そっちじゃなくて」

みち子「え？」

大川「だから、そっちじゃなくてこっち」

大川、何かを揉むジェスチャー。

大川「おっぱい揉ませてくれ」

みち子「は？」

大川「金、金は持つてるから！」

大川、財布から取り出した一万円を見せる。

大川「な？いいだろ？」

大川、立ち上がってみち子に近づく。

みち子「……さ、三万」

大川「三万？」

みち子「三万、三分で」

大川「おっぱいだけでいぶん取るな、ババ

アのクセに。年金無くなるわ」

みち子「ふ、富士山のカップラーメンの値段、知ってますか」

大川「何の話してんだ」

みち子「嫌なら別にいいです」

大川「嫌じゃない、嫌じゃないから」

大川、みち子の胸を揉もうとして、

みち子「先にお金」

大川、財布から三万を出してみち子に渡す。

大川「ほら、これで文句ないだろ」

大川、乱暴にみち子の服に手をつっこみ胸を揉み始める。

大川「これこれ、極楽だわ」

みち子、腕時計を見ながら時間が経つのを待っている。

○同・食堂

みち子、入居者の食事の見守りをしている。

別のテーブルで哲子が一人で食べている。哲子、箸を落とす。落とした箸を足で蹴ってみち子の方へ飛ばす。

みち子、新しい箸を哲子に渡す。

哲子、箸を受け取りながら

哲子「頼みがあるの」

みち子「……はい」

哲子「母を捜してほしいの」

みち子「母……ですか？」
と哲子を見る。

哲子「ボケてると思った？お墓でいいの。見つけてほしい」

みち子「だったら私じゃなくて探偵会社とかで」

哲子「そういうのわからないから頼んでるの」

みち子「ですけど私も」

哲子、みち子の手をギュッと握る。

哲子「お願い」

みち子「……名前は？」

哲子「え？」

みち子「お母さんの」
哲子「やってくれるの？」
みち子「探偵会社に頼むだけなら」
みち子。ペンとメモ帳を取り出す。
メモ帳に「小川セツ」と書く哲子。

○同・表

みち子が自転車を押して清美と出てくる。
自転車にまたがるみち子。ペダルを踏むといつもの音が鳴る。
清美「いい加減、新しいの買ったら？」
みち子「なんか面倒で」
「私、使っていない自転車ありますよ。よかつたら乗ります？」
後ろから樹里が声をかけた。

○団地・表と通り（早朝）

まだ薄暗い朝。みち子が自転車の前でしゃがんでいる。
両足スタンドで立てられた自転車。
樹里に貰ったものだ。
そのペダルをみち子が手で回す。快適な音で後輪が回る。その音を目を閉じて聞く。
自転車に跨るとスタンドを蹴ってペダルを漕ぎはじめ。
グングンとスピードを上げて走る自転車。
人も車もない明け方の道路をみち子の自転車が走っていく。
みち子の顔、開放感に満ちている。

○同・事務室

みち子と樹里、入ってくる。
みち子「おつかれさまでした」
樹里「おつかれさまでしたー」
ふたり、タイムカードを押す。
みち子「錆びてない自転車で走るのってこんなに気持ちいいんだって」

樹里「それ、今ので三度目です」
みち子「だって」

樹里「大げさですって。ただ普通の自転車で走っただけですから」

みち子「イージーライダーって映画知ってる？」

樹里「わかんないですけど」

みち子「主人公がアメリカのハイウェイをバイクでぶっとばすの。なんかそんな気分だった」

樹里「だから大げさですって」

デスクでパソコンに向かっていた神原、顔を上げて

神原「でも死んじやいますよね」

樹里「え？」

神原「イージーライダー。主人公死んじやいますよね」

みち子「でしたっけ？」

樹里「てか、普通にネタバレなんですけど」

神原「いや見ないっしょ？樹里ちゃん」

樹里「いや見るかもしれないし」

みち子「あの、私先に。おつかれさまです」

樹里「おつかれです」

神原「おつかれさまです」

みちこ、出て行く。

○通り

みち子が自転車を漕いでいる。

さっそうと走る自転車。

赤信号で止まる。

信号が赤から青に変わる。

みち子、ペダルを踏もうとして

「すみません」

振り向くと自転車に乗った警察官が立っている。

警察官「防犯登録の確認だけ、いいですか？」

みち子「はい」

警察官「じゃ、お名前は？」

みち子「恩田みち子です」

警察官「恩田さん、ちよっとチェックします」

ね」

自転車の防犯登録番号をチェックする
警察官。

警察官「お名前もう一度いいですか？」

みち子「恩田みち子ですが」

警察官「恩田さん、この自転車どうされました？
あなたじゃありませんよね」

みち子「あ、これ友達に借りてて」

警察官「借りた？この自転車盗難届出てます
けど」

みち子「え？」

警察「とりあえず署までご同行よろしいです
か」

○警察署・表

みち子と孝介が出てくる。遅れて出て
くる樹里。

孝介、警察官に頭を下げると車へ足早
に歩いていく。

みち子「(樹里に)じゃ、また後で」

樹里「本当、すいませんでした。元カレがウ
チに置いてったやつで。盗んでたとか本当
に知らなくて」

みち子「気にしなくていいから」

樹里「何かあったら言ってください。この借り、
絶対返しますんで」

みち子「気にしなくていいって」

孝介、振返って

孝介「急いで」

みち子「じゃ」

みち子、孝介の方へ走っていく。

○走る車・中

運転する孝介。みち子、黙って外を見
ている。

孝介「何か言うことあるでしょ？」

みち子「……」

孝介「まず謝ってよ、仕事終わりにこんなとこ
まで来させて」

みち子「ごめんなさい」

孝介「恥ずかしい。中学生かよ。自分の歳考えてよ。だいたいさ、あんな頭悪そうな女から簡単にモノを貰わないでしょ、普通。なんか程度が低い顔してたし。それにさ……」
みち子、腕時計を見つめて時間が過ぎるのを待っている。

○ハピネス今泉・トイレ

みち子が服をまくり上げて大川に胸を見せている。

それを見ながら大川がトンカツ弁当を食べている。

大川「俺は昔ボツワナでダイヤ掘ってたんだ」

口から米粒を飛ばしながら話す大川。

大川「その頃、警察に追われててパスポートが取れない訳よ。でも浅草にある××って古本屋に頼めば、そういうの手配してくれるのよ。で、ボツワナでダイヤ掘り」

みち子の腕時計からアラーム音が鳴る。

みち子が服を降ろす。

みち子「時間です。三万円。トンカツは別料金ですから」

大川「わかってるよ。ババアなんだから、ち

よっとぐらいサービスしろ、サービス」

大川が出した金を、無表情で受け取るみち子。

○恩田家・キッチン

床に座ったみち子がぬか壺に入ったビニール袋に金を入れている。と、携帯電話が震える。着信に○○探偵社と表示されている。

○同・哲子の居室

みち子、急須にお湯を入れている。

哲子「ボツワナ？それってどこ？」

みち子「なんかアフリカらしいです」

哲子「あの人、ホラ話ばかりしてるから」

みち子「この前は、昔フィリピンで拳銃作ってたって言ってました」

哲子「じゃ、困ったら私たちもボツワナでダ
イヤでも掘っちゃおう？」

みち子「そうしましょうか」

笑いあうみち子と哲子。

みち子、哲子にお茶とタッパーに入っ

たぬか漬けを出す。

哲子「あら、美味しそう」

ポリポリとぬか漬けを食べる哲子。

みち子「それで、お母さんの件ですが」

哲子「わかったの？」

みち子「××霊園っていう墓地です」

哲子「……そう」

みち子「あとで領収書お渡ししますんで、清

算してもらえれば」

哲子「いろいろ手間取らせちゃったわね。お

金はずんでおくから」

みち子「探偵社とやり取りしただけなんで、

お金は別に」

哲子「そうはいかないから」

みち子「いえ、本当に」

哲子「ちがうの、もうひとつ頼みがあるの」

みち子「もうひとつ？」

哲子「そのお墓に連れて行ってくれない？」

みち子「無理だと思えます」

哲子「なんでよ」

みち子「ここから車で三時間はかかる場所

すよ」

哲子「お願い」

みち子「失礼ですが、ご親族の方は？」

哲子「ずっと独身。だから誰もいないの」

みち子「……神原さんに確認してみます」

哲子「本当に？うれしい」

笑みを見せる哲子。

○事務室

神原が、菓子パンを食べながらパソコン

画面のシフト表を見ている。

神原「ウチも人が足りてないからね、半日以

上抜けられるのは厳しいな」

みち子「そうですか」

神原「入居者は淡口さんだけじゃないわけだし。恩田さんが淡口さんにかかりっきりの間、ここにいる他の入居者たちのケアが出来るようになるわけだからさ」

みち子「ですよね」

神原「気持ちはわかるんだよ、気持ちは」

神原、菓子パンを牛乳で流し込む。

みち子「ありがとうございます。事情を話せばわかってくれると思いますから」

神原「そう。じゃ悪いけど」

○多目的室

炭坑節が流れている。

それに合わせて椅子に座ったまま踊る入居者たち。

少し離れたテーブルにみち子と車椅子の哲子がいる。

哲子「どうしてもダメなの？」

みち子「人手が足りなくて。お気持ちはわかるんですが」

哲子「わかるの？」

みち子「はい？」

哲子「あなたにわかるの？外に出れない私の気持ちは」

みち子「……」

哲子「適当なこと言わないでよ」

みち子「すみません」

哲子「謝るんじゃないで方法を考えてほしいって言ってるの」

炭坑節、流れ続けている。

○ハピネス今泉・表

みち子と清美が出てくる。

みち子、前に使っていた錆びついた自転車を押している。

清美「それで、いくら出すって言って？淡口さん」

みち子「三十万」

清美「そんなに？」

みち子、うなずく。

清美「だったらやろうよ。今みたいにもちみちみ稼いだって月のタバコ代ぐらいにしかないから」

みち子「でも半日も仕事空けられないですし、許可も出なかったですから」

清美「三十万だよ、三十万」

みち子「あとはもう夜中に連れ出すぐらいしか」

清美「じゃあ連れ出す？バレたらクビだけだね」

みち子「……バレなきゃいいってことですか」

清美「そりゃそうだけど」

みち子「清美さんが夜勤のときにだったら」

清美「私がよくても、もう一人の夜勤にバレルでしょ」

みち子「ですわね、やっぱ無理ですよね」

と、後ろから樹里が走ってくる。

樹里「先輩、待ってくださいよ」

みち子と清美、顔を見合わせる。

清美「(みち子に) あんた免許は持ってる？」

みち子、首を振る。

清美「じゃ、あと一人。運転手がいる」

樹里「何の話です？」

清美「当てはあるけど」

みち子「本当ですか？」

樹里「ねえ、何の話してるんですか？」

○恩田家・リビング(夜)

みち子が出かける支度をしている。

志津子、みち子を見て

志津子「あら、こんな時間に出かけるの？」

みち子「今日は夜勤で」

志津子「昼だけじゃなかったの？」

みち子「どうしても人が足りないって言われて、今日だけ」

志津子「本当に仕事？ほら、夫の出張中に妻が、とかいう話聞くからか」

みち子「まさか(苦笑い)」

志津子「そうよね。いいわね、あなたは。孫がいたら私もいろいろ楽しみが来たのに」

みち子、無言で出て行く。

○通り(夜)

みち子、夜の道を自転車で走っていく。
街灯の光が、みち子の体を次々に通り
過ぎていく。

○ハピネス今泉・表(夜)

みち子の自転車が閉じられた門の前で
止まる。
門を開け、自転車を押して中に入って
行くみち子。

○同・事務室(夜)

樹里がパソコンに入居者の体調などを
入力している。

みち子、入ってくる。

みち子を見て、樹里が軽く頭を下げる。

みち子「ごめんなさい、こんなこと頼んで」
樹里「大丈夫です。自転車の借り、返したか
ったんで。清美さん、哲子さんの居室に行
っています。私、何も見なかったことにす
るんで。てか今もみち子さんのこと、見え
てないんで」

みち子「ありがと。じゃ、朝までに戻って
くるから」

樹里「ラジャです！」

真剣な表情で敬礼する樹里。

○同・廊下(夜)

みち子、哲子の居室へと歩いていく。
向かいから哲子の車椅子を押して清美
が歩いてくる。

清美「車、もうすぐ着くつて。さつき連絡あ
った」

みち子、哲子の目を見てうなずく。

みち子「代わります」

清美に代わって哲子の車椅子を押すみ
ち子。

○同・表(夜)

みち子と哲子、清美が出てくる。

門の近くに停車した車のライトが一回だけ点滅する。

清美「あの車」

近づくみち子たち。

運転席にいるのは河野である。

車窓を開けてみち子を見る河野。

河野「清美からいろいろ聞いてますんで。よろしく」

みち子、軽く頭を下げる。

みち子「(哲子に)じゃ、車に移りますね」

みち子、後部座席のドアを開け哲子を車に乗せる。

清美が哲子の車椅子を畳みトランクへ入れる。

哲子の隣に座りドアを閉めるみち子。

清美が腕時計を見る。時計の針は午後九時を指している。

清美「(河野に) 早番が来るのが朝七時。六時までには戻って」

河野「楽勝だって。じゃ、行ってくるわ」

哲子に乗せた車が夜の道を走り出す。

○走る車・車内(夜)

河野、運転しながらバックミラーで後部座席のみち子をチラチラとみている。座席でウトウトしている哲子にみち子がタオルケットをかけている。

河野、ミラー越しにみち子を見て

河野「大変でしょ、介護の仕事」

みち子「ええ、まあ」

河野「俺、一緒に住んでるんで。清美と」

みち子「そうなんですな」

河野「うるさいでしょ、あいつ。俺も家でさんざん言われてるから気持ちスゲえわかる」

みち子、愛想笑い。

河野「まあ普段もうるさいけど、あつちの時もスゲえうるさいんですよ」

ガラガラと笑う河野。みち子、顔が強

張る。

河野「これ見ます？」

河野、スマホを後部座席のみち子に渡す。

河野「そのチャンネル、俺がやってるの」

スマホにYouTubeの河野のチャンネルが表示されている。

河野「びつくりした？ほら、再生して再生」

「○○を全部食べてみた」という河野の動画。再生回数はどれも二桁ほど。

みち子、再生ボタンを押す。

スマホから河野の声が流れる。

河野の声「はい！ということとで今日は大好評の全部食べてみたシリーズの第八弾！○○の弁当、全部食べてみた〜！」

河野「どう？すごいでしょ」

みち子「(愛想笑いで)すごいですね」

河野「なにが？」

みち子「はい？」

河野「なにがすごいなの？」

みち子「いや、だから」

河野「あんた俺のことバカにしてるでしょ？そういう顔してるもん」

みち子「そんなことないです」

河野「じゃ、なんで笑ったの？さっき笑ってたじゃん」

スマホから河野の声が流れている。

河野の声「うまつ、うまーい！うまいんぐ！」

河野「消せよそれ」

みち子、慌てて再生を停止する。

気まずい沈黙が車内に流れる。

哲子は眠っている。

河野、再びミラー越しにみち子を見て

河野「全然そうは見えないけどねえ」

みち子「はい？」

河野「あんた、ジジイ相手に体売ってんでしよ？」

みち子「何言ってるのかわからないです」

河野「ウソつかないでよ、知ってんだから」

みち子「そんなことやってません」

河野「わかってるって。清美にいろいろ聞いたんだから」

みち子「……」

河野「で、いくら？」

みち子「は？」

河野「いくらでヤラせんのお金、困ってんでしょ。こんど俺も頼むわ」

河野、ニヤニヤ笑う。

みち子「止めてください。タクシーで行きますから」

河野「俺は別にいいけどタクシー見つかる？」

その婆さんいるのに見つからなかったら、どうするの？」

河野、路肩に車を止める。山道で行きか

う車はない。

みち子「……車出して」

河野「は？」

みち子「車、出して」

河野「止めろとか行けとか、勝手なこと言う

よね。頼み方ってのがあるんじゃないの？」

みち子「……すみません。車出してください」

河野、後部座席に体を取り出してみち子の頭をポンポンする。

河野「よくできました」

再び走り出す車。

〇××霊園・表（夜）

みち子が車のトランクから車椅子を出し哲子に乗せる。

みち子が腕時計を見る。時計の針、午前二時を差している。

みち子「（河野に）三十分ぐらいで戻りますから」

河野「さつさとよろしくー」

座席を倒して眠りだす河野。

〇同・敷地内（夜）

みち子が哲子の車椅子を押している。

プリントされた地図を見ながら

みち子「あそこです」

と前方の墓石を指さすみち子。

哲子「ひとりで行かせて」

みち子「でも」

哲子「いいから」

哲子、車椅子の車輪を回し墓石へとゆつくり進んでいく。

墓石の前に着く。

哲子、杖を振り上げると墓石を思いつきり叩く。

何度も何度も墓石を打つ哲子。

みち子、鬼気迫る表情の哲子をただ見つめている。

× × ×

哲子の車椅子を押しながらみち子が歩いていく。

哲子「驚いた？」

みち子「少し……かなりかも」

哲子「ひどい母親でね、酔っぱらって帰ってきてはよく殴られた。私が十二のとき、突然出て行ってそれっきり。だから死ぬ前に絶対やってやろうって思ってたの。あー、スツキリした」

哲子が笑う。みち子もつられて笑う。

哲子「あなたご両親は？」

みち子「父はずっと前に亡くなりました。母も先日」

哲子「そう、嫌なこと聞いてごめんなさい」

みち子「いえ。……うちの母、ずっと寝たきりだったんです。私、五年間、母の介護してました。最後の方は、死にたい死にたいって言うって」

哲子「……そう」

みち子「母の人生は幸せだったんだろうかって、最近そればかり考えて。こんなこと聞くの、おかしいかも知れませんが、どう思いますか？」

哲子「……やっぱり、娘に最後まで世話され

たんだから幸せだったんじゃない？」

みち子「ならいいんですが」

哲子「なんてね。嘘、嘘」

みち子「は？」

哲子「娘でもわからないんでしょ。あなたの母親が幸せだったかなんて、会ったこともない私がわかるわけない」

みち子「……」

哲子「そんなこと考えるより、あなたが楽しく生きることの方が大事じゃないの？ 私はね、楽しそうと思っただからやったのよ」

と、杖で叩くジェスチャーをする哲子。

○同・表（夜）

みち子と哲子が後部座席に乗り込む。

運転席の河野、腕時計を見る。時計は

午前三時を差している。

河野「遅いんだよ、早くしろよ。使えねえババアたちだな」

哲子、後ろから杖のグリップを河野の首に食い込ませる。杖を引っ張ると河野の首が締まっていく

声にならない声をあげる河野。息ができていない。徐々に赤くなっていく河野の顔。

哲子「二度とそんな口きくんじゃない」

口をパクパクとさせている河野。

哲子「わかった？ わかったら返事しなさい！」
声が出ない。杖をバンバンと叩く河野。
みち子が哲子を止める。

みち子「哲子さん、死んじゃう！」

哲子が手を緩める。

解放された河野が激しく咳きこむ。

河野「……ババア、てめえ」

哲子「またやる？」

哲子が杖を構える。

ひるむ河野。

哲子「手を出したら警察を呼ぶから。嫌なら車、さっさと出しなさい」

アクセルを踏んで車を発車させる河野。

○ハピネス今泉・表（朝）

空が明けかけている。

門の前に停まった車。

みち子が車椅子に哲子に乗せている。

清美が車に走ってくる。

清美「もう七時半よ、何してたの？」

運転席の河野、ムスツとした顔で答え
ない。

清美「何かあった？」

河野「別に」

みち子、哲子の車椅子を押しして建物へ
入って行く。

○ハピネス今泉・表(夜)

月明かりが建物を照らしている。

○同・事務室(夜)

樹里がパソコンに記録を入力している。

清美が部屋に顔を出す。

清美「樹里ちゃん、ちよつと話があるんだけ
ど」

樹里「何です？」

清美「お小遣い欲しくない？」

樹里「え？そりゃ欲しいですけど」

○同・トイレ・中(夜)

大川が便座に座ってトンカツ弁当を食
べている。

大川の前にポロシャツとブラジャーを
まくり上げて樹里が立っている。

目をつぶっている樹里。

その側で腕時計を見ている清美。

大川「やっぱ若い子のおっぱいは最高やな。
ババアのおっぱいと違って飯が進むな、飯
が」

樹里の胸を凝視しながらトンカツを食
り食う大川。

清美「あと四十秒……三十秒」

大川、さらにトンカツをかき込む。

清美「あと二十秒……十秒」

大川の顔、興奮で赤くなっている。

清美「九、八、七、六」

目をつぶったままの樹里。
清美は時計を見ている。

大川、のどにトンカツを詰まらせる。
だが、誰も気づいていない。

清美「五、四、三」

呼吸ができない大川。

腕時計を見ている清美。

目をつぶったままの樹里。

清美「二、一、〇、終わり……」

同時にドタツと床に倒れる大川。

樹里「え？」

清美「ちよっと！」

駆け寄る清美。

大川、呼吸をしていない。

○恩田家・寝室（夜）

眠っているみち子。

携帯電話が鳴っている。

みち子、電話を取る。

みち子「もしもし？」

○道路（夜）

みち子が夜の道を自転車で必死に走っている。

○ハピネス今泉・表（夜）

樹里が門を開ける。

みち子の自転車が入って行く。

○同・廊下とトイレ・外（夜）

走るみち子と樹里、トイレへと駆け込む。

○同・トイレ・中（夜）

床に倒れたままの大川。

その側に清美がいる。

みち子「！」

清美「弁当、食べてたら急に。私のせいじゃ」

みち子「救急車は？」

清美、首を振る。

みち子「心臓マッサージは？」

樹里「やったけどダメで」

みち子「警察は？」

同じく首を振る清美。

みち子、大川の口と鼻に手をかざす。

呼吸はない。

大川の口の中をのぞくみち子。

トンカツが詰まっているのが見える。

大川の口に手をつ突っ込んでトンカツ

を引っ張りだす。

だが、大川の呼吸は回復しない。

みち子「何時頃？」

清美「わかんない、わかんないから！」

樹里「たぶん一時間は経ってないかと」

みち子「ここ、私が見るから樹里ちゃんは業

務に戻って」

樹里「でも」

みち子「他の入居者、いま誰も見れてないか

ら。早く」

樹里「……はい」

樹里、出て行く。

みち子「どうする？警察に電話する？」

清美「私のせいじゃないから」

動揺している清美。

みち子「なんで樹里ちゃん巻き込んだの？」

清美「だって、こいつが倍の金出すっていう

から」

みち子「……車椅子取ってきて。何とかする」

清美「嫌、ひとりにしないで」

清美、みち子にしがみつく。離そうとし

ても離れない。

みち子が清美の頬を張る。

みち子「私が何とかするから。だからしっか

りして」

頬を押さえる清美。

みち子「車椅子、とってきて」

清美「……わかった」

うなずくとトイレから出て行く清美。

みち子が周囲を見回す。

トイレの備品入れから介護用手袋を取

つてはめると、トイレットペーパーで
大川の口の周りについたトンカツの油
をぬぐう。

次に大川の靴下を片足だけ脱がして、
靴下を大川の口につっこむ。

のどの奥まで指を伸ばして靴下を押し
込むみち子。

清美が車椅子を押しして帰ってくる。

清美「何してるの？」

みち子「いいから」

みち子、大川を便座から車椅子に移動
させる。

みち子「大川さん、部屋に運んでくる。ここ
の掃除お願い。ゴミは私が持って帰るから」

みち子、大川を乗せた車椅子を押しして
トイレを出る。

床に、大川の喉から出したトンカツが
転がっている。

○同・表（朝）

駐車場に停まっているパトカー。

○同・大川の居室

検視官が大川の遺体を調べている。

大川の口の中からピンセットで靴下を取り
出す検視官。

○同・事務室

清美が警察の事情聴取を受けている。

清美「朝の健康チェックで部屋を開けたら、

あの状態で……」

警察官「その前に、何か物音とか気になるこ
とはありませんでした？」

清美「いや、特には……」

清美、緊張でびっしょりと汗をかいて
いる。

×

警察官「その、異食？」

×

みち子「はい、異なるという字と食べるとい
う字で異食。認知症の方は多いんです」

×

警察官「その症状は前にもあったんですか？」
みち子「ええ。ティッシュや石鹸を食べたり
とかはたまに」

警察官「認知症の傾向はどれぐらいから？」
樹里「ここ一カ月だと思えます。それまでは、
かなりしつかりしてたんですが、急に症状
が進んだようです。でもこんなことになるな
んて……」

樹里、泣き出す。

× × ×

警察官が神原に挨拶している。

警察官「今回は、事件性無しということで処
理いたしますので」

神原「ご苦勞様でした」

警察官「それでは」

頭を下げる神原。

警察官、敬礼して出ていく。

近くの席でパソコンのキーボードを叩
いていたみち子、深く息を吐く。

○カラオケ店・個室

みち子、清美がソファに座っている。

マイクを手に歌っている樹里。

みち子「こんな簡単にごまかせるなんて、な
んか怖い」

清美「MVPはあの子のウソ泣きだね」

樹里、歌い終えて

樹里「別にウソ泣きじゃないですから」

清美「じゃ何？あのクソ野郎が死んで悲しか
ったの？信じらんない」

樹里「悲しいわけではないじゃないですか。悔し
くて泣いたんです」

清美「悔しい？どういうこと？」

樹里「わかんないですけど、いろいろ全部、
悔しかったです」

清美「よくわかんないけど」

みち子「……そうだね、悔しかったね」

樹里「ほら！みち子さんならわかると思った」

みち子「わたし、やめようと思うの」

清美と樹里の動きが止まる。

清美「辞めるって？ハピネス？」

樹里「え、辞めちゃうんですか？」

みち子「そっちじゃなくて裏の仕事のほう。

クソ野郎とはいえ人が一人死んだわけだし」

樹里「あー、びっくりした。それ、わたしも

賛成です」

清美「……」

みち子「清美さんは？」

清美「……あんたたちがそう言うなら」

樹里「じゃ、最後にみんなで歌いませんか？」

清美「なんでそうなるのよ」

みち子「ごめん。わたしも遠慮しとく」

樹里「ノリ悪いなー。じゃ樹里がメの歌、い
かせてもらいます」

何かを吹っ切るように熱唱する樹里。

○清美のアパート・室内

河野「バカじゃないの？」

清美「え？」

河野「続けたほうがいいって。ジジイもババ
アも喜んでるわけじゃん。俺らも金が稼げ
る。ウインウインじゃん」

清美「でも、またあんな事があったら」

河野「ごまかせたんでしょ。じゃあ大丈夫じ
ゃん。清美のやってること、間違っ
てない。大体給料が安すぎるのがおかし
いじゃん」

清美「それはそうだけど」

河野「てか、やめてどうするの？一生コツコ
ツ借金返すつもり？そのうち自分が施設に
入る歳になっ
てんじゃない？」

清美「……」

河野「もつと俺のこと考えてよ。借金無くな
ったら結婚しようって約束したじゃん」

清美「うん」

河野「じゃ、がんばる。バレないようにこつ
そり一人でやればいいじゃん。大丈夫だっ
て、俺がついてるから」

河野、清美のおでこにキスをする。

○ハピネス今泉・浦上の居室

清美「うな重、食べたくないって何でなの？」

浦上「……」

清美「何？どうしたの」

浦上「みち子さんじゃないと、私は」

清美「なんで？注文して弁当渡すだけじゃない。別に私がやっても変わらないんだから」

浦上、首を振る。

清美「いいから注文してよ。美味しいもん食べて死にたいんでしょ？」

浦上「大川さん、なんで亡くなったんです？」

清美「何でって」

浦上「言えないんですか？」

清美「だから靴下食べて、のどに詰まらせたって」

浦上「大川さん、ボケたりしてなかったですよ」

清美「急におかしいんじゃないですか？」

浦上「とにかく、みち子さんにしか私は頼み

ませんから」

清美「バカじゃないの？」

浦上「頼みません！」

○同・裏

建物の裏で、清美が携帯電話をかけている。

清美「だから、みんな頼まないって言ってるの」

河野の声「なんでよ？」

清美「知らないわよ。スケベジジイが死んで恐がってるんじゃない？」

河野の声「なんとかしろよ」

清美「なんとかって、どうすりゃいいのよ」

清美の視線の先に、小島が歩いてるのが見える。

清美「またかける」

清美、電話を切ると小島に駆け寄る。

清美「小島さん、こんなとこ歩いちゃダメじゃない。戻りましょ」

小島「わたし、家に帰ります。明日、現場が早いもので」

清美「今日は遅いから、少し休んでからね、いいでしょ」

小島「そうした方がよいですかね？」

小島を建物の中へ連れて行く清美。

○同・小島の居室

小島を連れて入ってくる清美。

床やベッドに服やおむつ、ティッシュなどが散乱している。

清美、ベッドに小島を座らせる。

と、ベッドの上に財布が置いてあるのが目に入る。

清美、財布に手を伸ばし中身を見る。数千円しか入っていない。カード入れは空。

財布を放り投げると、金目のものが無いか物色し始める清美。

床に落ちている分厚い封筒を見つける。中に数冊の通帳とキャッシュカードが入っている。

カードを裏返すと四ケタの暗証番号がマジックで書かれている。

携帯で電話をかける清美。

清美「ハピネスに来て。いいから、すぐ」

清美、カードをポケットに入れて部屋を出て行く。

○同・表

門から出てくる清美。

河野の車が走ってきて止まる。

車の窓が開く。

河野「なに？急に」

清美、小島のキャッシュカードを河野に渡す。

清美「裏に暗証番号が書いてある。コンビニ周ってお金下ろして」

河野「……マジ？」

清美「一時までに帰ってきて。昼休み終わる

前に戻すから」

河野の車、走り出す。

清美、建物へと足早に戻っていく。

○ハピネス今泉・事務室（朝）

朝の申し送りをしている夜勤の介護士
と早番のみち子、樹里たち。清美の姿
が無い。

みち子、神原に

みち子「菱山さん、今日休みですか？」

神原「ちよっとね。今日は来れないと思う」

樹里「えー、ヘルプ誰か頼んでます？いなか
ったらキツいんですけど」

神原「いいから、とりあえず業務開始して」

樹里「……何かありました？」

神原「別に何も無いから」

樹里、神原にしつこく詰め寄っている。

部屋を出るみち子。

○同・食堂

入居者に食事のプレートを配るみち子。

哲子のテーブルにプレートを置く。

と、食堂に樹里が駆け込んでくる。

樹里「みち子さん」

みち子「どうしたの？」

樹里「清美さん、警察に捕まったって」

みち子「警察？」

樹里「（声をひそめて）小島さんのキャッシ

ュカードから勝手にお金下ろしたって」

みち子「！」

樹里「大川のこと話してるかも」

みち子「あなたは大丈夫。私がやったことだ

から」

樹里「でも」

みち子「もし警察に呼ばれたら、ありのまま

を話して」

樹里「みち子さんは？どうするの？」

哲子「どうかした？」

みち子「私、行かないと」

哲子「行くなってどこに？」

みち子「わかりません。でも、行かないと」
哲子「なんだかわからないけど、気をつけて」

みち子、哲子の手を握る。

みち子「哲子さんも」

哲子「何？なんだかもう会えないみたいじゃない？」

みち子、樹里を見て

みち子「じゃあね」

樹里「みち子さん？」

みち子、走って食堂を出て行く。

○通り

みち子が自転車で走っている。

全力でペダルを漕ぐみち子。

チェーンが切れ、アスファルトの道に
自転車ごと倒れる。

起き上がると、倒れた自転車をそのままにして走り出す。

○恩田家・玄関／廊下

ドアを開け、汗だくのみち子が入ってくる。

乱暴に靴を脱ぎ、廊下を歩いていく。

○同・キッチン／リビング

みち子、入ってくる。

孝介と志津子がソファに座っている。

志津子「あら、みち子さん。早いじゃない」

孝介「ちようどよかった。いま電話しようと思っ
てたんだよ。今日は早めに帰ってほしくてさ」

孝介も志津子もニコニコしている。

みち子「どうかしました？」

志津子「孝介さん、昇進したの」

孝介「給料も結構上がったんだ。みち子も仕事、辞めてもいいぞ」

みち子「……え？」

孝介「今まで苦労させたな。本当に感謝してる。ありがとう」

みち子「……」

みち子の頬に涙がこぼれる。

孝介「プレゼントがあるんだ。絶対みち子が

欲しいやつだよ」

みち子「私の、欲しかったもの？」

孝介「そう。音も静かでき。気に入ると思っ

よ。ちよっと目、つぶってて」

みち子が目をつぶる。

孝介「じゃ、開けていいよ」

目を開けるみち子。

孝介「じゃーん！」

みち子の目にの前にあったのは、掃除機である。

孝介「高かったんだぜ、これ。ほら、母さん

にうるさく言われてただろ。これ使えばも

う大丈夫だから」

志津子「私、そんなにうるさく言ってたかし

ら？でも、これで部屋散らかってたら許さ

ないからね、なんて」

笑い合う孝介と志津子。

みち子「……」

孝介「せっかくだから、使ってみてよ」

みち子「……バカにするなよ」

孝介「何か言った？」

みち子「バカにするな！私の欲しいものは、

これじゃない！こんなじゃない！」

キッチンへと歩いていくみち子。

キャビネットからぬか壺を取り出して

頭上に持ち上げる。

みち子「私の、欲しいものは！」

みち子、ぬか壺を思いつきり床に叩きつける。

部屋中に飛び散る壺の破片と糠と野菜。

孝介と志津子の顔に飛び散った糠が降り

かかる。

みち子、札束が入ったビニール袋をつか

むと家を飛び出していく。

○通り

全速力で走るみち子。

すべてから解放されたようなその顔。

○ハピネス今泉・事務室

樹里がパソコンに向かってる。

樹里「あ！」

近くの席の神原、驚いて

神原「どうしたの？」

樹里「今日で清美さんの執行猶予、満了です」

神原「そんなのチェックしてたの？」

樹里「もちろん」

神原「勘弁してよ。その名前、聞きたくないんだから」

樹里「もう二年ですよ、二年」

神原「二年だろうが十年だろうが、聞きたくないものは聞きたくないの。あれで入居者減りまくったの、知ってるでしょ」

樹里「あー、二年かー」

神原「聞いてる？」

樹里、物思いにふけている。

神原「今、恩田さんのこと考えてたでしょ？」

樹里「わかります？何してんすかね、今」

神原「何してんだろうね」

○パン工場（早朝）

工場から自転車に乗って清美が出てくる。

後ろからギコギコと自転車の音が聞こえる。

その音にハッとして急ブレーキで後ろを振り向く。

自転車に乗った見知らぬ主婦がベルを鳴らして通り過ぎていく。

清美、再び自転車のペダルを漕ぎだす。

○ハピネス今泉・哲子の居室

部屋をノックして樹里が入ってくる。

樹里「哲子さん、小包届いてますけど」

哲子「あら、誰かしら」

樹里、小包の伝票を見るが、差出人の名前はない。

樹里「ちよっとわかんないすね。なんか海外

からみたいですけど」

哲子「海外？」

樹里、伝票をよく見て

樹里「えーと、ポ、ポツツ？ポツツワナ？」

哲子、小包から中身を取り出す。

箱の中にはこぶし大の石が入っている。

樹里「石、ですか？」

哲子、窓からの光に透かしてその石を見る。

それは、ただの石のようにもダイヤの原石のようにも見える。

○海外のどこか

地平線まで続く一本道。

周りには果てしない草原が広がっている。

その一本道を走る一台の自転車。

軽快な音をさせてペダルを漕ぐ、みち子の姿。

おわり